

# 小屋保治宛「夏目金之助書簡二通」をめぐって

——関連書簡を含めて——

中村 潔

- 一、 小屋保治の人物像
- 二、 明治二十六年七月二十六日付  
齋藤阿具宛「夏目金之助書簡」
- 三、 明治二十六年八月十五日付  
立花銃三郎宛「夏目金之助書簡」
- 四、 明治二十七年七月二十五日付  
小屋保治宛「夏目金之助書簡」
- 五、 明治二十七年九月四日付  
正岡子規宛「夏目金之助書簡」
- 六、 明治二十七年十月十六日付  
正岡子規宛・狩野亨吉宛・小屋保治宛「夏目金之助書簡」
- 七、 磯部草丘（尺山子）『漱石さんの手紙』  
「渋柿」四八六号（昭和二十九）

明治二十七年七月二十五日、夏目金之助は伊香保温泉松葉屋旅館で小屋保治と対談。その直後、松島・瑞巖寺漂泊の旅があり、深い厭世に苦しんでいたことは周知のこととされる。帝国大学寄宿舎を出て、学友菅虎雄宅に寄食したが再び放浪。小石川区表町の尼寺法蔵院に下宿。菅虎雄の紹介で、鎌倉円覚寺塔頭帰源院で参禅。然し齋藤阿具宛書簡に、「遂に本来の面目を撥出し来たらず」とある。

翌二十八年四月に、帝大での研究生活から離れ、高等師範学校・東京専門学校を辞職して愛媛県尋常中学校に赴任。すべてを捨てての松山行きとして、これまた周知の事実。

こうした事に関連して、昨秋本学「国語国文学会」に報告した。以後書簡の順序を整理し、小屋保治の人物像に触れることにより、金之助の多意を理解する一助とした。その理由は、漱石作品の多数に失意を主題とするものが見られ、それらの原点として小屋保治と楠緒子の存在は無視することが出来ない。本稿は、これを裏付けるために金之助書簡の検討に加え、磯部草丘の一文にも触れることにした。

## 一、小屋保治の人物像

小屋保治は夏目金之助と帝国大学寄宿舎で同室。生涯にわたり漱石と親交を結んだ。慶応三年二月九日生まれ、金之助に対して、保治は明治元年十二月二十日と、ほぼ二年後の出生。群馬県南勢多郡木瀬村字筑井（うつばい）は現在前橋市筑井町で、生家は現存している。家系図を参照すると、小屋宇兵治とみちの二男。小屋家は代々名主をつとめ、江戸期寺子屋を開き子弟の教育に尽くした。長兄の右兵衛は木瀬村の村長。一族に秋田鉾専教授の小屋道治など、現在に至るまで教師の家系と考えられる。小屋家第六代当主小屋辰雄は前橋市小中学校校長。その長男亮一は小学校教師、妻勝世も小学校教師。三男宥三は県庁職員、妻美智子は珠算教授。分家民三は東京旧制中学教師。分家の四郎も群馬県富岡高女教師。一族の志づ江と磯部草丘の子、とし子は群馬大教授に嫁す。小屋保治と大塚楠緒子の次女節子は、東大教授大内兵衛の子、勉に嫁す。一族は前橋市筑井町に健在（小屋辰雄氏作製家系図による。昭和六十一年九月二十三日）。小屋家の近くに菩提寺の安養院などがあり、一族の墓多数。学問に理解のある父母のもとで、保治は記憶力抜群の才を培ってゆく。

明治十二年に開校した群馬県尋常中学校に十四年入学。

前橋高校の記録には「小屋三郎」とあり、長兄右兵衛と保治の間に早逝の男子があったので改名されたかと推察される。中学校時代の「小屋三郎」、大学時代の「小屋保治」、結婚後の「大塚保治」を記憶にとどめたい。

中学時代のニックネームは「ブクウオーマー」（本の虫）であり、全教科の平均九十七点の評価が残されている。明治十七年上京、帝国大学予備門文科入学。明治二十一年帝国大学文科大学哲学科に入学して、二十四年同期の菅虎雄・立花政樹・藤代禎輔・小川銀次郎・牧瀬五一郎・理科大学数学科卒業後に転科した狩野亨吉・一年以上級の藤井宣正の八名と共に卒業、恩賜の銀時計を受ける。同年七月大学院に進み美学を専攻。保治の起居していた寄宿舎に、夏目金之助・齋藤阿具・山川信次郎も入寮して親交を結ぶ。東京美術学校長の岡倉天心の知己を得、哲学者、大西祝の推薦により東京専門学校文科で、ハルトマンの美学を講ずる。明治二十六年七月、帝国大学寄宿舎監の清水彦五郎の紹介で、宮城控訴院長・東京控訴院長、大塚正男の長女楠緒子と知り合う。小坂晋氏の『漱石の愛と文学』（昭四十九講談社）によると清水彦五郎を前橋出身とするのだが、平成十七年東京大学総合図書館の花岡淳子氏に問い合わせたところ、次の教示を得た。

「清水彦五郎（1855—1913）。明治時代の官僚。嘉永七

年十一月十九日生まれ。もと筑後（福岡県）の柳河藩士。藩の貢進生として開成学校に学ぶ。明治十七年文部省に入り、のち帝国大学書記官兼舎監となる。明治三十一年東京商業学校（現一橋大）校長に転じ、三十四年東京帝大書記官に昇任。大正二年四月十五日死去。六〇才。」

小屋保治は、明治二十七年七月二十五日付夏目金之助書簡を受けて、伊香保温泉松葉屋旅館で対談。その後、円覚寺参禅など数度にわたる金之助の放浪の旅がある。明治二十八年三月保治と楠緒子の披露宴。四月七日金之助の松山行き。

明治二十九年、文部省より独逸国費留学を命ぜられ、保治は米国經由渡欧。カント・ヘーゲル・シェリングらの哲学・社会学・心理学を学び、これを美学に活かす研究につとめる。明治三十三年夏帰国すると、ケーベルの担当していた美学講座を引き継ぎ、わが国初の帝国大学美学教授に就任。翌三十四年、美学研究の功績により学位授与。以後、昭和四年の退官に至るまで、美学研究はじめ美的現象を対象として、経験あるいは形而上学的な研究を三十年にわたり打ち込む。

大学での講義は西欧の唯美主義、象徴主義、美術史、造形美術、文芸思潮など広範囲にわたり、児島喜久雄・竹内敏雄・大西克礼・団伊能など優れた門下生を多出。漱石山

房に集う小宮豊隆・松岡譲・阿部次郎・芥川龍之介・久米正雄なども、保治の講義に接して深い感化を受けたとされる。

平成十七年企画展「夏目漱石」（編集石崎等氏）によれば、保治は自身の著作を単行本として世に問うことはなかった。漱石も保治に自著の批判を求めたり、著作を刊行したりするように薦めたが、保治は明治四十四年以降、講演筆記や口述談話等以外の論文はほとんど発表しなかった。昭和六年死去の際に、弟子達の手によって『大塚博士還暦記念 美学及芸術史研究』（昭6岩波）が発行された。保治は寄稿せず、弟子二〇名が最新の美学論文を師である保治に捧げた。編者代表、大西克礼。編集後記、阿部次郎。著者に阿部次郎・上野直昭・中川忠順・春山武松・上條憲太郎・深田康算・小宮豊隆・竹内敏雄・児島喜久雄など。

昭和八年五月十五日には、保治の美学論文が発表されていないことを惜しみ、保治の講義を記述した門下生たちの講義ノートをもとに、『大塚博士講義集Ⅰ 美学及芸術論』（岩波）を刊行。内容は美学概論、芸術論、造形美術論、建築論、彫刻論、絵画論と幅広いもの。

ついで昭和十一年三月五日に、『大塚博士講義集Ⅱ 文学思潮論』（岩波）が刊行されている。

保治と漱石の親交は帝大寄宿舎の時代から、漱石他界に

至るまで永続している。保治が留学から帰国した明治三十三年八月、入れかわるように同年九月金之助の英国留学。

半年後、学友狩野亨吉・大塚保治・菅虎雄・山川信次郎宛に、ロンドンでの体験を長文の書簡として発送。その末尾に、次の記載が見られる。「漱石全集」平八岩波版参照。齋藤阿具、立花銑三郎、小屋保治、狩野亨吉、正岡子規宛書簡も含めて。」

「夫からもう一つ狩野君と山川君と菅君とに御願ひ申す。僕はもう熊本に帰るのは御免蒙りたい。帰ったら第一で使つてくれないかね。未来のことは分らないが物が順にはこぶと見て、僕も死なず狩野君も校長をして居るとした処で如何ですか、御安くまけて置きますよ。大塚君の指輪は到着したかね。安達から手紙が行ったらう。山川君所帯を持ったか。僕は帰ったらだれかと日本流の旅行がして見たい。小天行杯を思ひ出すよ。僕はなかなか手紙をやらないから諸君に頼むのは妙だが、時々何か書いてくれ給へ。御願だ、宛名は公使館がいゝ。下宿は移る事があるから。」

狩野君

大塚君

菅君

山川君

明治三十四年二月九日朝

金之助

右の文中で熊本に帰りたくないと言った狩野・菅・山川に頼んでいるのは、狩野が五高教頭から一高校長に栄転していることや、金之助は五高教頭補佐、菅・山川は五高教授であることによる。保治には「大塚君の指輪は到着したかね」となげなく語りかけているが、このあたりは阿吽の呼吸と思われる。帰国すると狩野のはからいで一高講師として、小泉八雲の講座を継ぎ、あわせて帝大文科大学講師に就任。保治の配慮を謝する金之助の述懐があり、夏目鏡子氏『漱石の思ひ出』（昭3改造社）には、「帰国した時、経済的に苦しかったので大塚博士からお金を借りて助かった」との記述もある。

明治四十年二月、漱石は大阪朝日に招かれたが、東京を希望する漱石宅を東京朝日の主筆、池辺三山が来訪し意気に感じて入社。池辺吉太郎は金之助と二松学舎同期生との指摘もある。それより先、京都帝大教授招聘があつたが断つた。当時京都帝大文科大学長の狩野亨吉の存在が考えられる。同様に東京帝大教授の招きも断っているが、これまた大塚保治の存在を無視することが出来ない。保治は朝日入社を惜しんで説得したが失敗した模様。

明治四十一年四月、保治の妻、楠緒子『空薫』が東京朝日に連載されたが、漱石の推薦によるものであった。明治四十三年十一月九日、大磯で療養中の楠緒子死去。この時、

漱石は修善寺大患に伏す身であったが、葬儀にあたり保治は漱石を友人代表として依頼し出席はかなわぬまま受諾している。翌明治四十四年二月、文部省より漱石宅に学位授与通知。推薦は保治も列している博士会で、文部省と漱石の間を連絡につとめたが漱石は固辞。大正二年秋、保治と大塚家に行き違いが生じた時、漱石は保治側の代理人となり、大塚家の代理人、佐佐木信綱と協力して円満解決に運ぶ。その後保治は後妻タキと再婚。

大正五年十二月九日、漱石没。臨終の席に保治立ち会い、漱石のデスマスクを作製にあたり、彫刻家の新海竹太郎を紹介。新海は日本美術院の創立に参加し、後に太平洋画会彫刻部を主宰。山形の人で代表作「ゆあみ」「大山元帥像」など。保治は明治四十年の文部省美術展覧会の創始者。文展は現在の日展。大正六年一月、漱石の追悼会に保治出席、以後の会にも多く参加。

## 二、明治二十六年七月二十六日付

### 齋藤阿具宛「夏目金之助書簡」

齋藤阿具宛「夏目金之助書簡」

明治二十六年七月二十六日（水） 齋藤阿具 消

印27へ便

埼玉県北足立郡尾間木村中尾 齋藤阿具様 拝復

七月二十六日 東京本郷帝国大学寄宿舎

夏目金之助

御手紙拝見仕候。炎暑の候にもかゝらず昨今両日は意外の冷氣にて、はからずも土曜（用）前に新秋の涼味を感じ申候。嗚かし御地もしのぎよき事と奉推察候。大兄大学院許可は未だ下付相成、是は文部省の貸費一条まだ落着不仕故と書記官の話に御座候。但し辞令書廻達次第許可証は直ちに交付に相成る事と存候。

小屋君は其後何等の報知も無之、同氏宿所は静岡県駿州興津清見寺と申す寺院に御座候。菊池氏富士登山の日限は不定の由に御座候。同氏は両三日中に文部省より任命の沙汰有之筈につき夫まで旅行は見合せ居る趣きに承り候。本多君以外に任処杯の定まりたるもの無之やに存候。何れも奔走最中と存居候。他日夫々落着次第送別会杯の催しも有之候はゞ其時御報知可申上候。先は御回答まで。余は後便にて。勿々頓首

七月二十六日

金之助

齋藤君 梧前

齋藤阿具は帝国大学寄宿舎で、小屋保治・夏目金之助・山川信次郎と同室。明治二十六年七月帝大を卒業して、金之助は大学院に進学。齋藤は大学院許可がまだ下付されな

いので、金之助に問い合わせた模様。後日、大学院を修了して仙台の二高教授となった。留学から帰国した金之助は本郷駒込千駄木町に借家したが、齋藤家の住宅であつた。鷗外・漱石の住宅として愛知県犬山明治村に保存された。

近くに幸田露伴旧宅「蝸牛庵」もある。学友本多の任地決定以外、いずれも仕事を求めて努力している状況が窺える。原武哲氏『喪章を着けた千円札の漱石』（笠間書院）によれば、金之助は学友立花銃三郎を通して学習院赴任を望んだが、語学堪能な米国帰りの人物に敗れて苦勞している。学習院はほぼ決定と考え栃木県塩原温泉に滞在中であつたが、狩野亨吉・小屋保治は夏目敗れたりと打電して対策につとめている。

——学業順当の保治は明治二四年に大学院に進み、哲学者大西祝の推薦により東京専門学校文学科で美学を講じていた。金之助も二十六年大学院に進むと同校で英語を担当したが、保治の推薦によるものと推察される。

小坂晋氏は保治を金之助の二年年長と見ておられるが、帝国大学卒業年度を重視されたのであろうか。慶応三年二月九日生まれ、金之助に対し、保治は明治元年十二月二十日生まれ。逆に二年ほど金之助が年長であつた。

右の書簡中、小屋保治の興津清見寺宿泊に強い興味を寄せていることが注目される。

明治二十六年、文部省書記官兼帝国大学寄宿舎監、清水彦五郎のもとに、縁談推薦の依頼があつた。依頼は当時宮城控訴院長のち東京控訴院長の大塚正男であり、長女楠緒子にふさわしい人物を望むものであつた。法律家の大塚正男は法学部出身を望み、楠緒子は文科を希望。清水はこれを勘案して哲学科の小屋保治と、英文科の夏目金之助を推挙。このような事情のもとに、小屋保治の清見寺行きが考えられる。楠緒子は土佐士族の大塚家に生まれ、東京女子師範付属高等女学校を主席で卒え、佐佐木弘綱・信綱の竹柏園歌人。のち漱石に師事して小説家となつた才色兼備の人。

保治と見合いが寺院であることに、奇異な感じを抱くかも知れない。興津の清見寺は白鳳時代からの古寺で、武田信玄駿河進出の拠点や秀吉小田原攻め陣営となり、今川の人質となつた家康の部屋もある。三保の松原を見下ろす高台に位置し、東南に面する二階大広間は吹き上げる涼風に避暑の人多数。保治との対面はこの部屋かと推察される。興津周辺には、明治の政財界要人の別荘跡多数見られる。

金之助の書簡に「小屋君は其後何等の報知も無之、同氏宿所は静岡県駿州興津清見寺と申す寺院に御座候。」とあるのだが、「其後」という記述はどのようなことを示すのだろうか。後の述懐に「寄宿舎に一人残つて友人の蚤を手引き受けていた。其の頃小屋君が新しい革靴を持つて



興津に行き、美人に惚れられたのが羨ましかった。」とある。こうした述懐を考えると、「其後」は保治が興津行きを寄宿舎の学友に告げた後に立出していることと思われる。「同氏宿所は静岡県駿州興津清見寺と申す寺院に御座候。」と明確に記述されているので、寄宿舎の学友は保治の興津行きをすべて承知のことと考えられる。ただその目的が楠緒子との見合いであることは、清水彦五郎の推挙が保治だけではないので、金之助には伝えにくいことも考えられる。おそらく保治は二、三の学友に見合いの件を伝え、いずれ金之助にも報告するつもりではなかったか。金之助は鋭敏な感性の人と思われるので、いち早く齋藤阿具に打診したようだ。学友の就職や進学先の文中、保治だけ興津行きに関心を寄せているので、齋藤宛の書簡の中心はここにあると思われる。

### 三、明治二十六年八月十五日付

#### 立花銑三郎宛「夏目金之助書簡」

立花銑三郎宛「夏目金之助書簡」

明治二十六年八月十五日（火）立花銑三郎宛

帝国大学寄宿舎より

白雲のたなびく翠微の嶺より能々（態々）下界への御音信ありがたく拝誦仕候。小生近況と申せば過日来糞づ

まりにて下腹緊張其硬に耐へず下痢剤を以て其筋ばれるを医せんと存ぜし処、今度は反動にて暴泻万丈顔色憔悴然として、紅塵界の羅漢の如く日々うつらくと呻吟致居候。菊池の出仕は磯田の方未だ方付ざる故、任命の運びに至らず。小生出講の儀につきては種々事情出来余程奇観に御座候。何しろ駄目の事とあきらめ居候。

如仰、小屋君齋藤君は一昨日仙骨を興津より齋（またら）し来り候。仙骨のみならず鉄面牛皮おも兼て持参被致候。狩野君は高中の教師探索の為め未だ帰沢の途につかず、過日来小生も段々同氏の説論にあづかり、是非奮発の上赴任してくれろと依託被致候へども、未だ諾否の返答は不仕候。

最早暑中休暇も僅かに相成候へば、漸々寄宿舎も賑かに相成事と存居候。大兄も下界御なつかしく相成候はゞ可成早く御出山可然と存候。先は御返しまで。草々頓首

八月十五日

夏目金之助

立花兄 梧前

立花銑三郎は筑後（福岡県）柳川藩主立花家の人で、学習院に職を奉じていた。同じ学友の立花政樹は本家筋ゆえへ政樹さんへ、銑三郎は傍系ゆえへ銑さんへと呼び分けていたという。立花銑三郎は夏の休暇に栃木県塩原温泉で保

養、金之助に保治と齋藤阿具の帰京を伝えている。書簡はその返信。

傍線部には、これを受けて屈折した感懷がほの見える。

〈仙骨〉は仙人の骨相であり、非凡な風貌を示す。〈鉄面〉は意志の強いことや、鉄面皮の如く厚かましい意。〈牛皮〉も牛皮のとれば、鉄面と同様に厚かましい意ととれる。

ここでは、保治と齋藤が〈求肥（ぎゅうひ）〉の和菓子を生産に持参したことを示す。白玉を蒸し、砂糖・水飴と練り固めた物で古く〈牛皮〉と書いた。寄宿舎に戻った保治の表情には、着実に歩を進める者の落ち着きが窺えたのではないだろうか。これを認めながらも、屈折した感情を抑え合いの件を明確に理解していたように考えられる。

文中の「小生出講の儀につきては種々事情出来余程奇観に御座候。何しろ駄目の事とあきらめ居候」が、学習院就任の挫折を示し、併せて狩野亨吉から金沢の第四高等学校を薦められたが決断に至らぬ模様。狩野は帝国大学予備門（第一高等学校）を希望のため、現任校の四高に金之助を招いた。金之助は腹をこわして憔悴した顔色だが、後に高等師範学校と東京専門学校に職を得て学問に打ち込む態勢を整えている。保治と楠緒子は見合いをしたが、以後どのように展開するかは不明の頃であつたろう。縁談に向け

ては、金之助にも望みの糸が保たれている頃であつたと考えられる。

#### 四、明治二十七年七月二十五日付

##### 小屋保治宛「夏目金之助書簡」

小屋保治宛「夏目金之助書簡」

明治二十七年七月二十五日付

小屋保治宛（封筒うつし）

消印二十六日イ便上野・駒形

群馬県南勢多郡木瀬村大字筑井 小屋保治様

上州伊香保町 萩原重作方 夏目金之助

拝啓仕候。小生儀今七時二十五分の凧車にて出立、午後六時頃当地着表面の処に止宿仕候。木暮武太夫方へ参り候処浴客充満にて空間なく、因つて同家番頭の案内にて両三家の空間相尋ね候処思はしき処無之、ありとても一人にては困ると申す様な事にて不得已当家に参り候。勿論上等の処にては無之候へども室は北向の六疊にて、兼て御話しの山光風色は戸外に出でなくとも坐して掬すべき有様に、少しは満足致候。然し浴室杯の汚き事は余程古風過ぎて余り感心仕りがたく候。然し汚き事は伊香保の特色ならんかとあきらめ居り候。（未だ市街は散歩せざれども）家屋は総体こけらぶきにて眼界の三分一は此不都合な茶褐色の屋根



板の為に俗了被致候。かゝる処に長居は随分迷惑に御座候へども、大兄御出被下候はば聊か不平を慰すべきかと存じ夫のみ待上候。願はくは至急御出立、当地へ向け御出発被下度願上候也。余は後便に譲る。

七月二十五日 夜

夏目金之助

### 小屋様

右の書簡は、筑井の生家に帰省していた小屋保治を、伊香保温泉萩原重作方に投宿していた金之助が呼び出した内容として知られている。

金之助の伊香保行きを、熊坂敦子氏年譜（『明治文学全集』昭46筑摩所収）には、「明治二十七年七月二十五日、伊香保温泉に滞在」と記述され、重松泰雄氏年譜（『日本文学大系』昭49角川所収）にも「明治二十七年七月二十五日、伊香保温泉に行きしばらく滞在」とある。その他の多くの年譜に、同様の「滞在」とするものが見受けられる。温泉に滞在とあれば、湯治のイメージがありゆつたりした雰囲気を感じる。そのためか、群馬県立土屋文明記念文学館の第十七回企画展「夏目漱石」には、「明治二十七年七月二十五日、漱石が伊香保に静養に来て、筑井の実家にいた保治を呼び出す」と記載。「滞在」は「逗留」と同義で、しばらくの間とどまる意味がある。金之助が伊香保に滞在

し学友の保治がそこに合流したとあれば、同じ学友立花銃三郎の塩原温泉避暑生活を連想しがちである。

しかし金之助の書簡にはどこもゆつたりした気分はなく、とても静養の雰囲気ではない。かねてより保治は伊香保の景観を語っていたらしく、「兼て御話し山の山光風色は戸外に出でなくとも坐して掬すべき有様に、少しは満足致候」と記述している。榛名山中腹の石段ぞいの宿からは、赤城・子持・小野子の山が見え、遠くの武尊・谷川・浅間・妙義を望む。徳富蘆花『自然と人生』の背景になった場所だが、文中に不快感の多いことが注目される。

《北向の六畳》は『虞美人草』の藤尾自死北枕の和室を想起するし、《浴室の汚き事》《汚き事は伊香保の特色ならんかとあきらめ居り候》《家屋は総体こけらぶきにて眼界の三分一は此不都合な茶褐色の屋根板》は《石置き板葺き屋根》だろうから、明治初期の伊香保の家並み三割が不満と見える。七割は瓦屋根になっているのだが、更に、《かゝる処に長居は随分迷惑に御座候》とあるので、とても静養どころではなかったと考えられる。

こうした伊香保に向ける不快感は大塚楠緒子と伊香保との密接な関係を想起させる。楠緒子の父、大塚正男は土佐出身で、当時宮城控訴院長のち東京控訴院長。一家はたびたび伊香保温泉に避暑や湯治に訪れていたようである。し

たがつて楠緒子の小説には伊香保を背景とするものが多く、『露』や『伊香保だより』があり、百合の歩くようにすらりとした女性を描かれる。

この書簡の前年、明治二十六年七月夏に保治と楠緒子は興津清見寺で見合いをしている。良家の娘が一人で出席をすることは考えられないから、母親の大塚伸子が同行したと思われる。見合いの後の一年経過の中で、どのように進展したのであろうか。清水彦五郎の推挙した保治と金之助のうち、大塚家は保治との見合いを望んだ。この時点で縁談は保治に有利と考えられるので、書簡文中の不快感は、これを察知する金之助の感性を反映しているように思われる。

保治と楠緒子の挙式は明治二十八年三月だが、伊香保での金之助と保治の対談の頃は、まだ結婚に至るまでの道筋が立たなかったのではないだろうか。そのように考える理由は二点ある。最初に小屋家は保治の学費を捻出するため、かなりの土地を手放している。小屋家は代々名主をつとめ、父宇兵治は寺子屋を開いて周辺子弟の教育に力を注いだ。母みちは学問好きの女性で、夫を支えたことであろう。一族に秋田鉾専教授の小屋道治もあり、堅実を旨とする家系であり現在も教育に携わる人が多い。そうした恵まれた環境の中で保治は幼少より俊才の聲が高かった。おそらく小

屋家は保治の大成を一族あげて願ひ、その縁談に際して質実な家から迎えたいと考えていたのではないだろうか。

次に大塚家は由緒ある家柄であり楠緒子の夫になる者の入籍を望んでいる。せつかく育てた保治を他家に入籍させることは、宇兵治・右兵衛ともに即断できないことであろう。出来ることなら、保治のもとに妻を招きたかつたろう。小屋家は長兄の右兵衛が家督を継いでいたから、形式上は二男の保治が大塚家に入籍することも可能である。

そうした両家の事情があるために、見合いから一年経過しても挙式の段取りを決めるに至らなかったのではないだろうか。推察の域を出ないが、保治は大塚家の人々に対して両親長兄の理解につとめる旨語っていたように思われる。大塚家はこれを受けて静観、落ち着いて時期を待ったのではないだろうか。

一方の夏目金之助が、保治の見合い後、動きの停滞に注目するのは当然である。寄宿舎生活の中で、折に触れて保治と語り合ったのではないか。保治は大塚家に話したように、金之助にも実家の説得につとめている事情を打ち明けたかも知れない。

この時点で保治の説得が失敗すれば、金之助の大塚家入籍の機会も現実味を帯びてくる。それゆえ金之助の伊香保行きが、七月二十五日であることに大きな意味のあること

が判明する。保治は夏の休暇で実家に帰省していた。当然父宇兵治と長兄右兵衛に向けて、自身の入籍問題を相談していることになる。金之助は寄宿舎で休暇を過ごしつつ、その成り行きを待っていたと思われる。その保治を伊香保に呼び寄せることは、見合いから既に一年保留となっていた保治の実家説得の結果を確認するためと考えられる。

したがって金之助の伊香保行きは当初より滞在のためではなく、いわんや静養などという内容であるはずがない。保治が帰省の折に実家を説得することを金之助も承知していたので、松葉屋に投宿したその夜書簡を認めて、翌二十六日消印をもって発信したと思われる。これを受けて保治は二十七日か二十八日には松葉屋で対談。二十九日頃には、実家と寄宿舎に向けて別れたろうか。金之助の松島・瑞巖寺行き放浪の旅は八月上旬と考えられるので、伊香保から帰京してすぐに旅の用意にとりかかっていることになる。以後、いったん東京に戻ってより湘南海岸の漂泊があり小石川区指ヶ谷町の菅虎雄宅に止宿。そこを飛び出したのち寄宿舎には戻らず、小石川区法蔵院に下宿。極度の人間嫌いとなり不安の切迫した頃で、菅虎雄の紹介で鎌倉円覚寺の塔頭帰源院に入り翌年一月まで釈宗演・釈宗活のもとで参禅。しかし悟りの境地には至らなかった。

伊香保対談の直後に、こうした金之助のめまぐるしい動

きのあることは、保治の実家説得が認められたことを物語っている。保治からの説明を聞いた金之助は、打撃を受けながらもこれを祝福していきよく縁談を譲ったと思われる。その心情は、『それから』の代助が親友の平岡に三千代を譲ったという記述に共通する。

然し、保治と別れて寄宿舎に戻る車中あたり、金之助の失意はにわかにはふくれ上がったのではなからうか。愛の対象を失うことから喪失感の深さに目を見張り、その痛手を癒すべき参禅や放浪の旅を重ねた。それらの動きは、すべて保治との伊香保対談に発するものと考えられる。

## 五、明治二十七年九月四日付

### 正岡子規宛「夏目金之助書簡」

明治二十七年九月四日付

正岡子規宛「夏目金之助書簡」

九月四日火）正岡子規（全集大6）消印ト便

下谷区上根岸町八十二番地 正岡子規宛

帝国大学寄宿舎 夏目金之助

拜啓 昨夜又々持て余したる酒囊飯袋を荷ひてのそく、と帰京仕候。小生の旅行を評して健羨々と仰せらるゝ段、情なきことに御座候元来小生の漂泊は此三四年来沸騰せる脳漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せん為の

みに御座候。去すれば風流韻事杯は愚か只落付かぬ尻に帆を挙げて歩ける丈歩く外他の能事無之、願くば到る処に不平の塊まりを分配して成し崩しに心の穩やかならざるを慰め度と存候へども、何分其甲斐なく、理性と感情の戦争益々劇しく、恰も虚空につるし上げられたる人間の如くにて、天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは、安身（心）立命致底無覚束候。俊鶴一搏起てば將に蒼穹を摩すべし、只此頸頭の鉄鎖を断ずるの斧なきを如何せん杯と愚痴をこぼし居候も、必竟驀向に直前するの勇氣なくなり候為と慚愧に不堪、去年松島に遊んで瑞巖寺に詣でし時、南天棒の一棒を喫して年来の累を一掃せんと存候へども、生来の凡骨到底見性の器にあらずと其丈は断念致し候故、踵を回らして故郷に帰るや否や再び半肩の行李を理して南相の海角に到り、日夜鹹水に浸り妄りに手足を動かして落着かぬこころを制せんと企て居候。

折柄八朔二百十日の荒日と相成、一面の青海原凄まじき光景を呈出致候。是屈究（究意）と心の平かならぬ時は随分乱暴を致す者にて、直ちに狂瀾の中に没して瞬時快哉を叫ぶ折、宿屋の主人岸上より危ない／＼と叫び候故、不入驚人浪難得称意魚と吟出したれど、主人禅機なき奴と相見え問答も其丈にて方がつき申候。右の有様故

別段面白き事もなく只錢を使つた処が大兄よりは幅が利く丈にて、其他の「コンヂション」は大兄の方遙かによろしくと断定仕候間御自身も左様御承知可被下候。俗界に在て勉強が出来ぬ由、御嘆息御尤もには御座候へども学園の府たる大学院に在つて、勉強すべき時間はありながら勉強できぬは実に心苦しき限に御座候。此三四年來勉強といふほど勉強をした事なく、常に良心に譴責せらるゝ小生の心事は傍で見る程氣染な者には無之候。

小生近日中下宿致すやも計りがたく候。其折は又御報知可申上候。

先は右近況迄

草々不一

九月四日

金之助

正岡賢契

座下

子規宛書簡の要点は三カ所と思われる。まず「昨夜又々持て余したる酒囊飯袋を荷ひてのそ／＼と帰京仕候」とあるので、放浪の旅が二度あることを示している。松島瑞巖寺の旅と、湘南海岸の旅であり、以後の円覚寺参禅を放浪と考えれば三度を数えることになる。そのいずれも不平の塊まりを分配して、心の平穩を願うとある。ついで傍線部「理性と感情の戦争益々劇しく」の部分、保治の縁談を理性の上では認めながら、感情の面からは穩やかならざる

葛藤に苦しむ意と考えられる。平常心に戻るまでは虚空につるし上げられるが如く、悟れるか奈落に落ちるか到底安心立命の境地は覚つかないと記述している。末尾の傍線部は、寄宿舎を出て下宿するかも知れないとある。寄宿舎仲間には休暇のあとの勉学に専念している頃であり、保治や学友に再会するのも面はゆい心があつたろうか。その言葉通りに、十月十六日には正岡子規・狩野亨吉・小屋保治宛に、法蔵院に下宿の旨書き送っている。

そのほかに注目したいのは、「大学院に在って、勉強すべき時間はあるながら勉強できぬは実に心苦しき限に御座候。此三四年來勉強といふほど勉強をした事なく、常に良心に譴責せらるゝ小生の心事は傍で見る程氣楽な者には無之候」とある箇所だろう。当時金之助は大学院二年目を迎えており、研究者の道を究めようとする意欲にあふれていたようだ。失意のために心を集中することが出来ないと訴えている。仮に金之助の失意がなかったとすれば、夏目金之助は英文学者の道に進んだと思われる。しかしその反面、失意の体験があつたからこそ幾多の漱石文学を世に問うことが出来たと思う。

金之助は法蔵院に移った以後、円覚寺塔頭帰源院で参禅したが悟ることはあたわず、翌二十八年八月三日の保治・楠緒子の披露の宴に出席する。兄直矩の羽織・袴を借りて

星岡茶寮に行ったのが三月十六日のこと。四月七日には愛媛県尋常中学校（現松山東高校）に向けて、東京を離れる大学院の研究も、高等師範学校・東京専門学校の職も、すべてを捨て去つての赴任とされる。こうした慌ただしい動きの原点に、保治との伊香保対談が考えられるのではないかと推察される。

六、明治二十七年十月十六日付

正岡子規宛・狩野亨吉宛・小屋保治宛  
「夏目金之助書簡」

学友三名に宛て、同じ日付をもつて投じられた書簡がある。放浪の旅から帰京して、尼寺法蔵院に下宿の旨を報告したもの。

1、十月十六日（火）正岡子規

はがき（全集（大6））消印ト便

下谷区上根岸町八十二番地 正岡常規宛

小石川区表町七十三番地 法蔵院にて

塵界茫々毀誉の耳朶を撲に堪ず、此に環堵の室を賃して蠕袋を葬り了んぬ。猶尼僧の隣房に語るあり少々興覚申候。御閑の節是非御來遊を乞ふ。

夏目金之助



書簡文中の、〈環堵（かんと）の室〉は小さい部屋の意。尼寺法蔵院の一室を借りたことを示す。保治宛にも同じ〈蟄袋〉の記述が見られる。漱石他界翌年に発行された全集に記載されているので、子規宅に漱石資料が多数保存されていたことを物語っている。〈塵界茫々〉がわずらわしい世俗と考えれば、『草枕』冒頭の〈智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。〉に共通する。放浪の心境が、後の作品に活かされていることを読み取れる。

## 2、十月十六日（火）狩野亨吉

はがき（全集（昭30）） 消印ト便  
麴町区飯田町四丁目 狩野亨吉宛

小石川区表町七十三番地 法蔵院にて

所々流浪の末遂に此所に蟄居致候。御閑暇の節は御来遊可被下候。 夏目金之助

狩野亨吉宛書簡に、〈蟄居（ちつきよ）〉との表現があるのは注目される。蟄居は単に外出しないこと、部屋にこもることにとどまらず、江戸時代の武家社会にあつては武士に課せられた刑でもあつた。蟄居で想起するのは、英国留学の際にロンドンの一室にこもつて勉強したこと。金之助は武家出身の意識が高いらしく『坊ちゃん』の四章に〈仕

方がないから泣寐入りしたと思われちゃ一生の名折だ。是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ。〉と啖呵を切っている。『夢十夜』の五話で、武士は敵將に捕らわれて死ぬか生きるかと問われる。死ぬと答えるその時代でも恋はあつたから死の前に一目恋しい女に逢いたいと言う。敵將は夜明けの鶏が鳴くまで待つと言う。女は白い馬に乗り、細い足で腹をけてひたすら闇夜を走る。女の髪は吹流しのように尾を曳いた。其の時、道のはたで突然鶏の声がした。思はず手綱を強くひきしぼる。馬は前足の蹄を堅い岩にはつしと刻み込んだ。再び鶏が鳴くと、女は手綱をゆるめ馬は膝を折つて人馬もろとも深い淵に消えた。蹄の跡はいまだ岩に残っている。鶏の声を真似たのは、天探女（あまのさぐめ）である。蹄の痕が岩に刻まれている間は、天探女は自分の敵であるとの記述。白馬は幸福の使者の意とされる。

文中の〈死ぬか生きるか〉は、二君にまみえずか、屈服して家臣になるかを示し、武家の生き様に通じた内容となっている。『夢十夜』は〈こんな夢を見た〉と書き出す作品が多いのだが、内容は十分に練り上げた構成に思われる。五夜の鶏鳴は、司馬遷『史記』の〈鶏鳴狗盜〉から取材したと考えられる。斉の孟嘗君が秦の昭王に幽閉さ



れた時、こそ泥や鶏の鳴き真似のうまい食客の働きで逃れたとの故事が、『史記、嘗君伝』にあり、〈鶏鳴狗盗〉で知られる。一番鶏の声を待つて城門が開くので、鶏の鳴き真似で危機を脱した。

同様に五夜の武人の恋は、天探女の鶏鳴の真似により消滅している。武人の怒りが天探女に向けられているので、六夜では運慶の彫る護国寺の仁王が描かれる。天探女は記紀神話に〈天稚彦（あめのわかひこ）〉の従神として登場し、一説に後世の〈天邪鬼〉とされる。仁王や四天王に踏みつけられる小さな鬼や、毘沙門天が腹に付ける鬼面であり、わざと逆らうひねくれ者やつむじ曲がりの意。天探女の鶏鳴により武人の恋は永久に消滅したという記述に、楠緒子の縁談をすすめた大塚伸子の投影を推量することは出来ないだろうか。伸子は当然娘の多幸を願っており、金之助の漂泊から松山行きに心を痛めている節があるのだが。天探女の鶏鳴が『史記』によることから、宙駆ける馬も中国古典の〈天馬〉と考えやすい。しかし単に優れた馬や、天帝を乗せて駆ける馬は少しばかりイメージが違う。そこで考えられるのは、ギリシャ神話に描かれるヘペガススではないだろうか。ペルセウスに倒されたメドゥーサから生まれ、英雄ペレロフォンの愛馬として活躍。天に昇ろうとするペレロフォンを振り落として自ら天に昇る。

その蹄に蹴られた地から泉が湧き出したという。十一月の宵に、天頂付近に巨大な四角形を描いてペガサスの星座が見える。ペルセウスは大神ゼウスとダナエの子。メドゥーサを退治したほか、海の怪物からアンドロメダを救い妻とした。一月の宵に南中するペルセウス座は、メドゥーサの首を下げるペルセウスに見立てる。メドゥーサはギリシャ神話の怪物ゴルゴン三姉妹の一人。頭髮は蛇で黄金の翼を持ち、見る者を石と化す。ペルセウスに首を切り落とされたが、その時ペガサスを生んだ。

〈宙駆ける馬〉という点で、五夜とギリシャ神話のペガサスは共通している。加えて五夜の〈蹄の痕の岩に刻まれる〉と、〈蹄で蹴られた地から泉が湧く〉との表現がよく似ているし、両者ともに馬に乗る者は空から落ちてくる。このように考えると、五夜には『記紀』『史記』『ギリシャ神話』が混在していると思われる。漱石の愛犬ヘクトールが、スパルタのアキレウスに討たれたトロイの武将ヘクトルに由来することを考えると、早くからギリシャ神話に注目していたようである。

関連して、『幻影の盾（まぼろしのたて）』にも次の箇所が見られる。〈クララ〉とキリアムが叫ぶ途端に女の影は消える。焼け出された二頭の馬が鞍付きのまま宙を飛んで来る。先なる馬がキリアムの前にて礎ととまる。とまる前

足に力餘りて堅き爪の半ばは土に喰ひ入る。』との記述は、五夜の馬を想起させる。

続いて〈盾〉の説明に、「中心に五寸ばかり圓が浮き上がり、恐ろしき夜叉の顔。右から盾を見るときは右に向かつて呪ひ、左から覗くときは左に向かつて呪ひ、正面から盾に對ふ敵には固より正面を見て呪ふ。」「髪の毛は悉く蛇で、其の蛇は悉く首を擡げて舌を吐いている。」「遠き昔しのゴーゴンとは是であらうかと思はるゝ位だ。ゴーゴンを見る者は石に化すとは當時の諺である」と記せられている。ゴルゴンはステノ、エウリエアレ、メドゥーサの三姉妹の怪物で、頭髮は蛇、齒は猪の牙、腕は青銅、黄金の翼を持ち、目は人を化石にする魔力がある。『幻影の盾』にも、ギリシャ神話を濃厚に取り入れている。

クララに失恋して暗然としているキリアムに、盾は「まだクララを諦めることは出来ないか」と呼びかけ、盾の魔力によりクララとの百年の恋を成就させる。ヘキリアム（ウィリアム）がマリアの像の前に跪いて祈願を凝せ立ち上がったとき、長い睫（まつげ）がいつもより重たげに見えた』との箇所は、マリア像とクララの面影が表裏一体であることを示すようだ。『夢十夜』一話でも、〈女の長い睫の間から涙が頬へ垂れた〉とあるし、『坊ちゃん』のマドンナが聖母マリア・わが淑女・あこがれの対象となる美し

い女性と共通する。

3、十月十六日（火）大塚（当時小屋）保治

はがき（うつし）消印ト便

帝国大学寄宿舎 小屋保治

小石川区表町七十三番地 法蔵院より

遊子漂蕩の末遂に蠹袋を此所に葬り了り申候。御閑暇の節は御来会可被下候。

小石川区表町七十三番地 法蔵院にて

夏目金之助

右の書簡は、昭和三十八年九月十日関東短期大学の小林一郎氏が新資料として報告した。当時国文科の女子学生が卒業論文の作製に、夏目漱石と小屋保治の關係をテーマに選んだ折、小林一郎氏の研究室に書簡写しを持参したことで、小屋家を訪ねて資料発見。女子学生は小屋家の遠縁にあたり、早くから漱石と保治が学友であることを理解していた。

小林一郎氏は傍線部の〈蠹袋（ぜんたい）〉が、原典によるものなのか、あるいは造語なのか字義不明で残念と述べた。氏はその後、東洋大学に転じ花袋研究に打ち込まれ先年他界。

平成十六年秋、群馬県南勢多郡笄井（現前橋市笄井町）

の、小屋保治生家を訪ね小屋ひさ江氏から漱石書簡を拝見させていただいた。その結果、次の点が判明した。

○ 岩波版「漱石全集」(平8)には小屋保治宛とあるが、小屋保治・

齋藤阿具・山川

信次郎の三名連

記であった。い

ずれも夏目金之

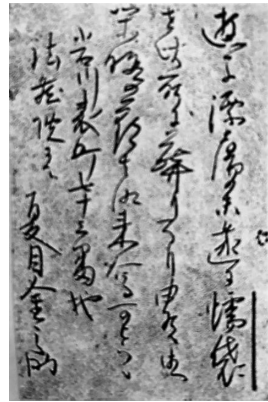
助と帝国大学寄

宿舍の学友。書

簡が小屋保治の生家に保存されているのは、それが筋である。と齋藤・山川が判断したものと考えられる

○ 岩波版『漱石全集』書簡集の活字は「蠕袋」とあり、右図のように書かれているので、「蠕」と記載したと思われる。しかし「蠕袋」はもともとどうごめく虫袋の意なので、小林一郎氏の字義不明は動かし難い。

「蠕袋」に注目しながら漱石真筆を検討すると、毛筆のため右に大きく跳ねている。そのため虫偏と理解されたが、本来は立心偏「忄」ではないだろうか。立心偏は「心」を示すので、「怯懦(きょうだ)」は弱い心を二つ重ねている。したがって、「蠕袋」は「だぶくろ」と読め、弱い心の袋を示すのではないか。子規宛



書簡に、「昨夜又々持て余したる酒囊飯袋を荷ひて、のそ／＼と帰京仕候」とある。「酒囊飯袋(しゅのうはんたい)」を、「才能がなく飲食するだけの者をのしる言葉」と藤堂明保氏「漢和大辞典」(平10学研)にある。これを参照すると、「蠕袋」の中に酒や食糧、金銭、衣料などを入れたと考えられる。簡便なりユツクサツクであり、信玄袋や合切袋状の品か。

昨秋本学「国語国文学会」で、「蠕袋」が仏教用語であることをご教示いただいた。「煩惱がうごめく人間の五尺の体」の意と知り、大変貴重なご指摘と深く心にとどめた。「門」の宗助は現状を「因果応報」の報いと考える。ついで『こころ』にも、執着心からむ輪廻が見える。「因果応報」「輪廻」とも仏教用語ゆえ、金之助は「蠕袋」の意味を正しく理解した上で書簡に記述したと理解される。

○ 当時子規宛に俳句の添削依頼をしたが、その時平凸凹・愚陀・愚陀仏・愚陀仏庵の筆名を使っており、明治二十七年から三十年にかけて虚無僧に材を取る句が多い。虚無僧は普化宗の有髪僧。深編笠をかぶり、首に頭陀袋を提げて諸国行脚。袋の中に布施や食糧を入れ、門前で尺八を吹いた。金之助の場合、虚無僧の諸国行脚に自らの放浪の旅を重ねていると思われる。虚

無僧は武家出身を主体とし、江戸幕府の隠密の仕事もあったとされる。諸国通行の特権を有し、昭和中期までその姿を見受けた。武家意識の高いと思われる金之助にとって、虚無僧は身近な存在であったと思われる。明治二十七年十月三十一日付正岡子規宛書簡に、法藏院の地図を書き、

大略右の如し。午後は大抵閑居す。必要なければ何処へも出ず。隣房に尼数人あり。少しも殊勝ならず。女は何時までもうるさき動物なり。

尼寺に有髪 of 僧を尋ね来よ

三十一日

夏目金之助

正岡賢契 座右

と見える。明治二十七年頃、夏目金之助は有髪僧の心境にあったと推察することが出来る。

○ 普化宗尺八根本道場は、京都市左京区白川にあった。明治初年廃仏毀釈により廃寺となる。その後、明治二十三年京都市東山区本町十五の七七八「慧日山東福寺」の寺域に復活された。京都五山に列する禅宗寺院東福寺は七万坪の寺域に二十五の塔頭を有し、明暗寺はその一つ。ともに臨済派の禅寺であることが機縁と考えられる。JR京阪東福寺駅から十分。三門手前左の、小ぶりの寺院。当時樋口対山が活動して、中興の

祖となる。

普化宗は教義や信仰上の内実はなく、尺八を法器と称し禅の修行や托鉢の際に吹奏した。尺八楽の歴史上重要な存在とされる。

明治二十五年七月、夏目金之助は帰省する正岡子規と同行して京都に遊ぶ（「日本近代文学大系」昭49角川所収〈重松泰雄氏年譜〉）とある。当時金之助は、帝国大学院に進む前年のこと。明治四十年、明治四十二年、大正四年にも京都滞在があるのだが、明暗寺を訪れたのは復活されて二年目の明治二十五年七月と考えられる。

○ 虚無僧に材を取る漱石俳句

〔平成八年版「岩波全集」所収 坪内稔典氏注解〕  
明治二十七年正岡子規宛書簡

尼寺に有髪 of 僧を尋ね来よ

明治二十八年子規へ送りたる句稿五 十八句

秋の暮閑所へかゝる虚無僧あり

明治二十八年子規へ送りたる句稿六 四十七句

卯の花に深編笠の隠れけり

明治二十九年子規へ送りたる句稿十三 二十七句

普化寺に犬逃げ込むや梅の花

明治二十九年子規へ送りたる句稿十三 二十七句

虚無僧の敵這入ぬ梅の門

明治二十九年子規へ送りたる句稿十四 四十句

仰向て深編笠の花見哉

明治二十九年子規へ送りたる句稿十四 四十句

女らしき虚無僧見たり山桜

明治二十九年子規へ送りたる句稿十九 十五句

### 初恋 二句

今年より夏書せんとぞ思ひ立つ

独り顔を団扇でかくす不審なり

### 逢恋 三句

降る雪よ今宵ばかりは積れかし

思ひきや花にやせたる御姿

影法師月に並んで静かなり

### 別恋 二句

きぬぐや裏の篠原露多し

見送るや春の潮のひたぐと

### 忍恋 二句

人に言へぬ願の糸の乱れかな

君が名や硯に書いては洗ひ消す

### 絶恋 二句

橋落ちて恋仲絶へぬ五月雨

忘れしか知らぬ顔して畠打つ

### 恨恋 二句

行春を琴掻き鳴らし掻き乱す

五月雨や鏡曇りて恨めしき

### 死恋 二句

生れ代るも物憂からましわすれ草

化石して強面なくならう朧月

明治三十年子規へ送りたる句稿二十五 六十一句

虚無僧に犬吠へかゝる桐の花

明治二十七年から三十年にかけて、虚無僧に材を取る漱石俳句は八句を数える。その八句の中間に、恋を題材とする句が十五句あり、しかも全句を同時に子規宛に発送している。注目されるのは、初恋、逢恋、別恋、忍恋、絶恋、恨恋、死恋の構成をとっており、小説の筋書きを覚える手法と考えられる。恋の句に使われている幾つかの表現を検討すれば、次のようになる。へ夏書（げがき）は写経の意だが、夏に愛に寄せる胸がいつぱいで足が進まない意もある。愛の成就を願って写経することだろうか。月に並ぶ影法師は、月明かりに照らされて歩く男女の姿。へきぬぎぬは「古今恋の部」に「明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき」とあり、男女別離の意。

へ春の潮へはへ行春へと同様に別れた女性。へ願の糸へ

は七夕に機織りがうまくなるように、竿の先に五色の糸を飾る。糸の乱れは男女の別離。「万葉卷二〇」に、「吾が妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ」とある。〈橋落ちて〉は、行き来のかなわぬ相思の男女。〈わすれ草〉は、やぶかんぞうの別称。身につけると物思いを忘れるという。「万葉卷十一」に「いかにして忘れむものそ吾妹子に恋ひはまされど忘らえなく」とある。〈強面（つれ）〉は、そしらぬ顔。「古今恋の部」に「風吹けば峯にわかるる白雲のたえてつれなき君の心か」とある。

こうして虚無僧句と破局の句を参照すると、あらためて夏目金之助の失意が深いものであったと理解される。関連する作品を挙げると、次のごときものが考えられる

#### 『草枕』（明治三十九年）

文中に描かれる梵論子（ぼろんじ）も、虚無僧の別名。主人公の那美の遠い祖先が、梵論子と恋に落ち駆け落ちしている。

#### 『行人』（大正三年）

単に道を行く人ではなく、仏道修行のため諸国を托鉢遊行する僧かも知れない。東京目黒の行人坂は修験者の集う寺院にちなむ地名。夏目金之助の諸国放浪の旅が投影されているように思

われる。

#### 『明暗』（大正五年未完）

虚無僧が首に提げる頭陀袋に、白字で〈明暗〉と染め抜かれていることに関する表題であろうか。「広辞苑」（昭和60）に、普化宗虚無僧の尺八の流派を〈明暗流〉とある。

#### 七、磯部草丘（尺山子）『漱石さんの手紙』

『渋柿』四八六号（昭和29）

磯部草丘は群馬県南勢多郡宮子村（現伊勢崎市）生まれ、小屋保治の親族。保治と同じ群馬県尋常中学校に学び、大塚保治家の書生となる。本名寛太、川合玉堂門の日本画家として号は草丘。漱石門の松根東洋城につき俳人となり、その号を尺山子といった。同門の「渋柿社」の重鎮となる。〈尺山寸水〉は、「春秋時代の呉や楚の国は大国だが、高い所から見下ろせば小さく見える」の意。〈尺蠖（せきかく）之屈以求信也〉は「尺取り虫がかがむのは、あとで伸びようとするため。後の大成のためにしばらく不遇を忍ぶべき」の意。

『渋柿』四八六号の表紙は草丘、題簽は夏目漱石、松根東洋城近詠が見える。巻頭に尺山子「漱石さんの手紙」があり、三輪青舟「漱石の俳句」、田島群峰「修善寺日記の



句」、他に「漱石の日記より」「漱石書翰抄」がある。『漱石さんの手紙』には、次の如き記述が見られる。

関東大震災の第三日目であつたと記憶して居る。麹町方面の火事が、牛込砂土原町方面へも何時燃え移つて来るか最早予測が出来なくなり、叔父は家の者達に避難準備をするよう言ひつけた。書生兼執事といふ私は叔父の仕事を手伝つた。

重要書類の撰り分けがあらまし終つた時、叔父は私に、これを焼けと手紙とノートの二束を渡した。

一束は、叔父にあてた漱石さんの手紙で皆長文の部厚なもので数十通あつた。こんな貴重なものを何で焼くのかと聞くと、叔父は「夏目の俺にしか相談できない事や、訴えられない事を、他人に見せることは出来ない」と言ふ。それでも惜しい氣がして躊躇して居ると、叔父は自分から焼き初めるので、しかたなく私も眼をつむつて変な文殻焼きを手伝つた。ノートの一束は、叔父の病間日記ともいふべきものなさうな。留学帰朝後ひどい神経衰弱に罹り、氣が狂ふのではないかと思ふ程病勢がつつたのでその過程を記して置かうと幾年か日記をつけて来たのだといふ。しかし幸に恢復してしまつた今日、考へて見ると、これは何等の価値の無いものであるといふ。如何にも叔父らしい考へ

方だと思ひ、仰せに従つて焼き捨てた。

先年『美学』といふ雑誌に、上野直昭さんの「大塚保治博士の思想」といふ講演筆記が載つてゐて、其中にこんなことがあつた。

「瑞西の大学教授で美学を講じて居たアミエルが、生前に何等の著述もせず只一心に日記を書いて遺し、死後余程たつてから一部が出版され、一躍有名になつたことは、御承知の方も多からうと思ひますが、先生が若し日記を書いて残されたら随分面白いものになつたのではないかと思ひますが、それすら先生は遺されませんでした。此点先生はアミエルよりもう一つ引込み思案であつたと申すことができませう。」

漱石さんの手紙のことゝ言ひ、病間日記のことゝ言ひ、上野さんの言はるる通り、叔父は引込み思案に相違なかつた。今あの二つのものが残つて居たならと、世間並に思つて見たり、又その内容を想像して見たりするのである。

右の文中にある上野直昭氏は、大塚保治門下の高弟の一人として美学を専攻、当時東京芸術大学長の職にあつた。礒部草丘、上野直昭とも保治に近い両名に、保治の人物像が強い印象を残していることが注目される。しかし「漱石書簡の焼却」を礒部草丘が引込み思案と考えることには、

すこしばかり違和感を覚える。その理由は、漱石の親しかった学友すべてが明治二十七年頃の放浪について語っていないからである。狩野亨吉、大塚保治、菅虎雄、齋藤阿具、山川信次郎らは、まるで申し合わせた如く真相に触れていない気配がない。漱石没後の回想や記述にも、ごく表面的な追懐にとどまっている印象がある。

夏目金之助の歩いた道は、学習院就職、失意、松山行、ロンドン下宿、籠城など挫折が多いと考えられる。これを利用して、文筆の仕事に才をふるい、漱石文学は高く評価されるに至る。そのすべてを熟知している学友達は、文学活動を守ろうとしたのではあるまいか。そこに、明治人の傑出した人間像を見る思いがする。〈夏目の俺にしか相談できない事や、訴えられない事を、他人に見せることは出来ない〉という保治の言葉こそ、学友達の総意ではないかと思われる。したがって、引込み思案と懸念される保治の寡黙な態度は、論語の〈巧言令色鮮し仁〉に通ずるものと考えられる。

ただ、草丘の指摘するように、大量の漱石書簡が保存されていたなら、漱石研究の貴重な資料となったであろうことは言うまでもない。今さら惜しんでも、すでに焼却されたものは戻らない。むしろ、明治二十七年七月の伊香保対談の書簡と、十月の法蔵院帰着の書簡との二通だけ保治の

実家に保管されていたことは幸甚と思われる。この二通が牛込砂土原町の大家保治家にあったら、共に焼却の運命にあったことになる。保治の兄、小屋右兵衛から現在に至るまで六十余年、小屋家は漱石書簡を保管された。今後も漱石研究の資料として守られることを切望したい。

「渋柿」磯部尺山子追悼号（昭四十二年三月渋柿社）に、俳人松岡凡草の一文が見える。「城先生（松根東洋城）の短冊を別ける時、漱石句〈有る程の菊なげ入れよ棺の中〉を松根宗一さんの奥さんがくれと言ったが、尺山子さんがこれは大塚保治家からむものだと言った。尺山子さんの手許にあるはずと思う」とある。漱石句「悼亡 ある程の菊なげ入れよ棺の中 漱石」は、現在磯部明彦氏が保存されている。

漱石は明治四十三年八月、修善寺の菊屋で大患。十一月十三日の新聞記事で大塚楠緒子の死を知る。日記に「新聞で楠緒子さんの死を知る。九日大磯で死んで、十九日に東京で葬式の由。驚く。大塚から楠緒さんの死んだ報知と広告に友人総代として余の名を用いて可いかといふ照会が電話でくる」と記述。十一月十五日の日記にも次のように書いた。

晴。床の中で楠緒子さんの為に手向の句を作る。

棺には菊抛げ入れよ有らん程

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

ひたすらに石を除くれば春の水

手向の三句のうち、一句、二句は葬送の意を込めたものと理解されるのだが、三句の表現はやや難解と思われる。石さえ取り除くことが出来れば、春の水はおだやかに流れてゆくととれる。関連して想起されるのは、明治二十七年恋の句の二作。〈別恋〉の「見送るや春の潮のひた／＼と」は、去って行く女性を寂しく見送る意があり、〈春の潮〉に女性を見ているようだ。ついで〈恨恋〉の「行春を琴掻き鳴らし掻き乱す」も〈行春〉は去って行く女性であり、琴を掻き鳴らすのは失意の苦しみではないか。

こうして〈別恋〉〈恨恋〉の春を主題とする句を考えると、追悼句の第三句にある〈春の水〉との結びつきが判明する。即ち明治二十七年の〈別恋〉〈恨恋〉などはすべて大塚楠緒子に向けられたものであり、その追悼にあたり当時の記憶が鮮やかによみがえって〈春の水〉の句に表現されたのではないだろうか。

今後も、漱石を学ぶ際には、俳句にとどまらず漢詩や新体詩にも留意したい。漱石作品は時に文体を変化させ、女性の立場に主人公を置きかえるので、焦点を合わせづらいことも生ずる。虚実ないまぜの表現など、それだけ深いものが感じられるので注意深く目を通したいと考える。